

保育者自身が日頃の実践を多少でもまともに研究して行く態度が大切だと思いま

す。

(東京・神田寺幼稚園)

「小児期に於ける体質究明の一方策」に

賞をうけて



竹村 計美

小児科の専門医として毎日臨床に従事して居りましたが、私は多くの病児及びそれに付き添って来る母親の態度をみるにつけて小児科の臨床医は小児の病理のみではなく、小児の生理及び心理を充分究明し、精神身体医学的にその体質を理解し、病理を知る事がより一層患児を疾病より速かに治癒せしめ、更に健康小児虚弱児童を疾病より護ると同時にたくましい発育をはからねばならない事を痛感致して居りました。

幸い昭和二十六年より新潟大学医学部

公衆衛生学教室の教授小坂隆雄博士の御指導を得、なお長野県学校医会長寺島博士の御援助により、小児に於ける動態的体質の研究に従事する機会を得ました。爾後小児の体質について特に幼児(保育園児)を中心として健康者及び病児を対象として年令差を五年間研究を続けて参った訳です。

第九回保育学会が諏訪市に開催にあたって校医会長寺島博士及び保育専門学院長根岸先生の奨めがあつて、その研究の一部を「小児期に於ける体質究明の一方

方策」として発表させていただいたのであります。

研究内容の概要

私達の生活現象は身体内部環境で絶えず平衡調和を外保たうと諸機能がいろいろと役割を演じ、また外部環境に対しては自己の生命の自由を守らうと体も心もいつも努力している。この努力する生活反応の表われを体質と考えられます。

生活現象の平衡状態を保つ機能の中で重要なものの一つに自律神経系があり、この中で交感神経と副交感神経がその役割を果している。内分泌(ホルモン)とくに脳下垂体副腎皮質系機能は生命現象体や心の働きに順応するのに非常に重要な役目を果していることが最近明らかにされて来た。即ち、このホルモンは生活反応の表われである体質を支配する重要な要因の一つであることが判る。

そこで私は脳下垂体副腎皮質系機能の一つのめじるしとされている血液中の白血球の一成分好酸球について調べ、好酸

球数の在り方、その増減を小児についての動態的に観察し、さらにそれをおして脳下垂体副腎皮質ホルモンがどのように小児体質に影響するかを考察してみた。勿論、この内分泌機能の検査には好酸球数だけを取り上げるのでは不十分だが、ヒンクルマン氏直接検査法が簡易で且つ正確であるところから多くの条件のもとで観察したのである。

検査対象は出生直後の新生児、乳児、幼児、小学生、中学生の健康児及び病児とその一部の家族であり、延べ数千人について行ったが、今回の報告は主として市内保育園児に重点をおき観察したその結果の一部を次に述べてみよう。それには先ず健康児の好酸球数値についての保育園児の年令的な特徴をはつきりさせたい。

先ず秋季の小児期（乳児より一五才）の年令的差異をみると幼児期（三才―六才）は好酸球数値一立方ミリメートル中四五〇。乳児二五〇。小学生三五〇。中学生二五〇。成人一五〇で幼児期が最も高

い。一方小児体質の年令的な特徴を考察すると幼児はとりわけ過敏性でこの年頃はエキリ年令期といわれるほどである。小児期の好酸球数値は年令あるいは季節などによって夫々特異の様相をあらはし静的断面だけですべてを判断することは出来ない。

次に幼児期の季節変動をみるに夏季はこの数値が著しく上昇し、また年令的にも違いがあることが確認された。とくに保育園の四、五才の幼児が夏季に於ける好酸球数の上昇は極めて著しい。それによつてこの年令があらゆる環境の刺激に対して敏感に反応し、順応しようと努力しているかが判る。この年令期の小児は夏季にエキリ、自家中毒症、その他急激症状を起し易いが、これは臨床的経験の事実と一致する。以上が小児期全般からみた幼児期の特徴である。

次に保育園児の好酸球数の個人的分布状態を観察し、その多少の実態を体質的に検討してみると、平均曲線（一立方ミリメートル中四五〇前後）より離れて上

位（五五〇以上）下位（三五〇以下）にあるものは外部からみると病気ではないが普通と違った体質を示している。即ち、上位にあるものは性格的に神経質に傾き湿疹、しもやけ、ぜん息性気管支カタル、じんましん夜尿症、蛔虫症にかかり易い。これに対して下位にあるものは抵抗力が強く、いろいろの悪条件に対して打ち勝つ力をもっている。

次に異常にとび離れて上位（一〇〇〇以上）にあるものは遺伝的異常体質が認められた。前記上位のものほかになお、発熱時けいれん、自家中毒症、猩紅熱などにかかり易く、性格的な異常が目立ち神経質で我儘で一才したことにも怒り家庭の暴君となり易く、落ち着きがなく疲れ易い傾向がある。この様に上位にある幼児についてはとくに注意しなければならぬ。

以上の結果からみて各人の体質の判定が可能となるわけである。

更に異常環境児として諏訪湖学園収容児童四名について観察した。此処では

年令が進むにつれて好酸球数が増加の傾向があり、中学の年令にはとくにその増加が認められた。これら好酸球数値は児童相談所や同学園の先生の調べた心理学的調査とよく一致した。同学園の児童は一般的に精神的には内向性で、神経質な傾向をもち、身体的には湿疹、しもやけ夜尿症、アレルギー性傾向がみられ、寄生虫の寄生も多かった。

今回は残念ながら、遺伝的傾向を調べることが出来なかつたが、取容兄弟共に異常過多を認める点より、とくに好酸球数値の高いものは遺伝的傾向をもつていと推定される。これによつて異常な環境は如何に児童に影響を与えるかがわかり、普通環境の児童にくらべ特異的な差異があることを確認した。

さて本研究の要点を申し上げると幼児期三才と六才の好酸球数の変動が激しくとくに増加率が高く副交感神経優越の傾向がある。

精神身体医学的な異常傾向ありと認め

られる保育園児は大体異常に好酸球数過多の傾向を示している。幼児期は生活反応が非常に活発になり、それに幼児の意志も加わつて、自律神経系ひいては各種ホルモン系の作用の動揺がはげしい状態であることを物語り、この幼児期の保育は非常に大切なものであることが解る。

これらのことは現在多くの心理学者、児童心理学者たちが、心理学的方面から研究している問題だが、このように科学的な実証で心理学を裏付けることが出来る。

小児の体質は遺伝的なものと環境的なものとが作用し合つた結果、創造された構え方であり、好酸球数の増減、多少の実態は小児体質を究明する上に、又幼児保育の実際に対して大いに価値ある一方策と考えられる。

以上は私が今回倉橋質をいただいた研究論文の概要であるが、勿論これですべての研究は終つたのではなく、目下これを基礎としてなお多くの条件に対して病

理心理の面からも研究を続けております。

この様な未熟な私の研究に対して最初の受賞に対してただ感激して居ります。御指導をいただいた恩師新潟大学小坂教授、色々と御把助を下さつた学校医会長寺島博士、及び発表に対して御便宜を計つていただいた保育専門学院院长根岸先生に対して深く感謝致します。

今後小児特に幼児の生理と心理を客観的な裏付けによつて益々究明し、精神身体医学の方向より、乳幼児の健やかな育成をはかり、保育の発達に努力、貢献し度く思つております。どうぞ今後とも皆様の御指導と御支援を賜り度く御願ひ申し上げます。

保育学会の発展を祈りつつ 擲筆致します。

（長野県立保育専門学院
諏訪赤十字病院小児科部長）